

コア科目

総合科目 総合コース

平成11年度

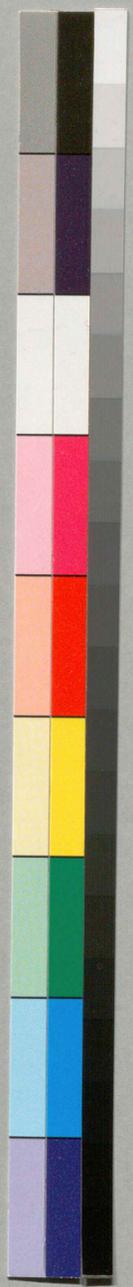
『心と体』 (99前-I)

『学問と私』 (99前-II)



お茶の水女子大学

11.5.31



平成11年度

大目

総合科目 総合コース

開設講義

- ◇『心と体』 (98前-I) 前期 水曜日 5・6時限
- ◇『学問と私』 (98前-II) 前期 水曜日 7・8時限

-
- ◇『マルチメディアの世界』 (98後-III) 後期 水曜日 5・6時限
 - ◇『女性と職業』 (98後-IV) 後期 水曜日 7・8時限

目次

◇『心と体』(99前-I) 前期水曜日5・6時限

・総合コースについて	I-1
・講義日程	I-2
・講義概要	I-3~13

◇『学問と私』(99前-II) 前期水曜日7・8時限

・総合コースについて	II-1
・講義日程	II-2
・講義概要	II-3~13

(巻末)

- 図書館活動
- セミナー質問用紙
- レポート表紙
- 小論文提出用紙

総合コース

◇『心と体』(99前-I) 前期水曜日5・6時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教授が講義するため、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

大学生活4年間はさまざまな「課題」と向き合っている。これらを取り組み、自分の生活を確立し、それを支える確かな**総合コース**っていくことが、そこでの課題である。この課題解決のためにも、その基盤となる「心と体」の課題は大事である。実質ある大学生活を送るための手掛かりを与えるものとして開講された。

対象学年 1年～4年

履修単位数 2単位（前期）

※1前期2単位

※2既に同じ「心と体」を履修した学生は、履修単位が認められない。例、複数の講義を受修した場合、卒業までに合計5単位が認められる。

心と体

セミナー 講義担当講師との共同で実施した「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆7月14日

講義担当が官報に要約(99前-I) 台紙、所定の質問紙と記入のうえ、講義担当(7/14日)へ提出すること。
 (※講義担当への資料は、できるだけ講義時間内にすること。)

図書館活動 大学の公式発行物として、「図書館情報(7月号)紙」を(個人単位)を決定している。

試験方法 試験はレポートにより行う。
 試験は二題(一)テーマを定めての読書、(二)個別読書。
 (詳細は台紙を参照する。)

◆出席日 7月14日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、締め切りの日までに講義担当へ提出すること。

◆締切日 7月24日

参考文献 参考文献には、なるべく学内図書室にあるもの、あるいは入手可能なものを選びたい。

総合コース

◇「心と体」(99前-I) 水曜日 5・6時限

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教官が講義するので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概要

大学生活4年間は、さまざまな「冒険」に満ちている。これらを乗り越え、自分の生き方を確立し、それを支える確かな知識・技術を身につけていくことが、そこでの課題である。この課題解決のためにも、その基盤となる「心と体」の問題は大事である。実りある大学生活を送るための手掛かりを与えるものとして開講された。

対象学年 : 1年～4年

履修単位数 : 2単位。(前期)

※1 前期2単位。

※2 既に同テーマ「心と体」を履修した学生は、単位修得が認められない。

※ 複数の講義を履修した場合、卒業までに合計8単位認められる。

セミナー : 講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。履修する学生は、必ず出席すること。

◆ 7月14日

講義担当教官宛に質問事項がある場合は、所定の質問票に記入のうえ、学務課教務係(7/9まで)へ提出すること。

(非常勤講師への質問は、できるだけ講義時間内にすること。)

図書館活動 : 学生の自主的行動日として、「図書館活動日(7月21日)」(巻末参照を設定している)。

試験方法 : 試験はレポートにより行う。

課題は二題 — (A) テーマを通じての課題。 (B) 個別課題。

(詳細については、別途指示する。)

◆ 出題日 7月14日

学生は、指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付の上、締切り日までに所属学部事務室へ提出すること。

◆ 締切り日 9月24日

参考文献 : 参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

平成11年度

「心と体」(99前-I) 講義日程

開講日時: 水曜日 5・6時限 13:20~14:50 (共通講義棟2号館201室)

月	日	講義テーマ 担当講師	月	日	講義テーマ 担当講師
4	21	医学と食品 (保健管理センター所長) 永川 祐三 教授	6	23	心と体—心身医学的アプローチ 末松 弘行 非常勤講師
	28	脳のしくみ 万年 甫 非常勤講師		30	心と体の問題で悩む人への援助法 (発達臨床学) 楡木 満生 教授
	12	心と体のヒーリングへの効果 について 亀井 勉 非常勤講師	7	7	スポーツ中でのこころとからだ (舞踊教育学) 杉山 進 助教授
19	おいしさ—食物を食べたとき の快さ (食物科学講座) 畑江 敬子 教授	14		セミナー	
26	身体意識の発達と精神病理 (心理学) 春日 喬 教授	21		図書館活動	
6	2	機能性食品 荒井 綜一 非常勤講師			
	9	心に反応する身体— 運動とスポーツが心と体とに与える 可能性— (舞踊教育学) 水村 真由美 講師			
	16	不登校を通しての自分さがし (人間文化研究科) 伊藤 美奈子 助教授			

医学と食品

永川 祐三

人は生まれて、生きて、死にます。生きている間だけは、快適に生きていたいというのが私達の念願ですが、その快適な生き方をこわすもの、それが病気です。病んで健康の有難さがわかります。今日、健康の維持・増進と長寿の達成のために、医学と食品の果たす役割は日増しに大きくなってきています。

食品は健康の維持・増進、病気の予防・治療に寄与するなど私たちにとって好ましい機能がある一方、好ましくない機能を示す場合があります。すなわち食品アレルギーの原因になり、また、癌の発生あるいは抑制にも、食品の影響が大きく、機能しているようなのです。

一方、医学、すなわち医学知識や医療技能は目覚しく進歩してきており、生命科学は高度に進展してきています。しかし、高齢化社会においては、なにもかも医師にまかせて解決してもらうという治療第一主義の考え方では、もはや対応できず、生きていくことが困難となってきており、医学・医療がこれまでに経験したことがない転換期に入ってきています。一人ひとりが生命とはなにかと考へ、生きていかなければなりません。すなわち、高度に発達した情報化社会の中で生活し、豊富な医学知識を持ち、自己の病状を自ら判断し、自己の生涯設計の中に治療方針を組み込むことが一人ひとりに求められてきています。

そこで、本講義では、現代医学が科学技術とともに進歩したが、地球環境も破壊されつつある現代社会において、病気、食品、機能性成分の3つの視座からトライアングルに今日の医療と健康を見直してみたいと思います。

〔参考文献〕

- 永山祐三『食べ物と薬のみ合わせ辞典』主婦と生活社(1988年)
- 永山祐三『病気治療に必要な食べもの事典』法研(1994年)
- 永山祐三他著『'93医学と食品事典』朝日出版(1992年)

『脳のしくみ』

萬年甫

今年に入ってから、わが国にとってはかねてからの懸案であった脳死移植が実現し、人々の脳に対する関心がにわかに高まって来ました。人類が地球上に誕生して以来ごく最近までは、どこの国でも自然死、すなわち心臓が動かなくなり、呼吸が停止した状態を人の死と見なしてきました。ところがこれからは、心臓が動き、肺で呼吸が行われていても、脳の働きが失われる脳死状態をもって人の死と見なすということが認められたわけです。従って、人間の死は自然死と脳死の2本立になったわけで、これこそ発想の大転換と言わなければなりません。その根底には、脳が、「知・情・意」という精神的な面と、食欲や性欲などを含む動物的・本能的な面のすべてを支配しているという思想があります。脳の働きが停止すれば、これら両面を併せた人間存在そのものが停止するという考え方です。

従って、これから我々が生きて行くためには、脳の構造と機能についてある程度正しい知識を持つことが不可欠です。本講では、人類が脳でものを考えることに気付いた古代から現在に至る脳の研究の歴史、脳の構造と機能を理解するための基礎知識のあらましについてお話するつもりです。

〔参考文献〕

1. 小出五郎：『脳—1400gの宇宙』 朝日選書351 朝日新聞社
2. NHK クリエイティブ：『脳と心』 第1-6巻
別巻1-2 日本放送出版協会
3. 萬年甫：『動物の脳採集記—キリンの首をかつぐ話』
中公親書1361 中央公論社

心と体のヒーリングへの効果について

亀井勉

昔から「病は気から」と言われていますが、近年これを裏付ける研究報告が相次いでいます。「個」における心と体の密接な関わりメカニズムは、精神神経免疫学の分野を中心に次第に明らかにされつつあるのですが、その成果は、あまりに多様な人の「心」の動きに対して果たして役に立てるのか、どのような方法をもってすればヒーリング(癒し)へと導くことができるのかという新たな課題が生じることと思われまいます。

というのも、人間は恐らくお互いを必要として生きており、自分自身と同時に他人を愛することこそ、その人の心身の健康にとって重要なこととなっているように見受けられるからです。この有機的なコミュニティこそが、人間社会のみならずその構成員である「個」の個体維持にとっても不可欠な「栄養素」のようなものであると考えられてきているわけです。人間の五感をもっては感じるできないような人間同士の相互作用もあるのかもしれませんが、ここでは、多様な「個」の個体維持すなわち健康増進にとってより普遍的に重要と思われる手段ないし方法論をいろいろな角度から考察し、心と体のヒーリングへの効果についてより客観的に評価を加えながら紹介していきたいと思えます。

〔参考文献〕

- 「心身免疫セラピー」 エリオット・S・ダッチャー著
中神百合子訳 春秋社
- 「がんは『気持ち』で治るのか!？」 吾郷晋浩監修 川村則行編著 三一書房

「おいしさ…… 食物を食べたときの快さ」

畑 江 敬 子

私たちは生命を維持し活動するためのエネルギーその他の給源として食物を摂取する。しかし、そのような給源としてのみ食物を食べるのなら動物の餌と同じである。食物として必要な条件は安全で栄養素を含み、しかもおいしいことである。おいしい食物を味わったときの快い感覚、家族や友人とおいしい食物を共にわかちあう喜びは何ものにも替え難い。このように、おいしい食物は人間の生活にうおいをもたらし、精神的満足を与えるものである。それでは私たちはおいしさをどのように判断しているのだろうか。また、そのおいしさは世界に共通のものだろうか。

さらに、日常の食生活において、知識として必要な食品の選択についても講義の中でふれる。

〔参考文献〕

島田淳子、今井悦子：調理とおいしさの科学、放送大学教育振興会（1998）

身体意識の発達と精神病理

春 日 喬

生まれたばかりの新生児は、外界の刺激に反応して体を動かしたり、泣いたりするなどの情動反応を示す。しかし、自分の身体を意識したりそれについて思い悩んだりすることはない。つまり、身体感覚はあるが身体意識はまだ未分化である。ヒトの身体意識はどのように発達し、どのように変容するだろうか。また、精神病理がどのようにこれに係わるだろうか。「心と体」という視点からこの問題を考えてみたい。ヒトの身体は新生児期から老年期に至る時間の流れの中で確実に変化する。ヒトがこの事実を知覚するレベルや仕方とも変容する。「私という意識」あるいは「自我意識」は、身体と不可分である。その意味では、自我の発達とは身体意識の発達を抜きにしては考えられない。ヒトの心と体の関係は、生体という一つのシステムの精巧な仕組みに支えられている。このシステムは、神経系から免疫系にいたるいくつかのサブシステムから成り立ち、生命維持機能をはたしている。

ところで、「心と体」をこれを取り巻く環境という視点から見ると、自我意識や身体意識の適正な発達とは、適正な自他関係の中でのみ発達する。これは重要である。人間関係の病理、コミュニケーションの病理は、自我意識の病理をもたらし、それは身体意識の病理に及ぶことになる。現代社会の中で、拒食や過食などの摂食障害が増加しているのはなぜだろうか。現代文明は我々になにをもたらしただろうか。現代に生きる中で、現代文明の意味と心身の健康を維持することの意味を考えてみたい。

〔参考文献〕

ヒルデ・ブルック著、岡部祥平・溝口純二 訳

『思春期やせ症の謎—ゴールデンケージ—』 星和書店（1979年）

時実利彦著『脳と心、からだの不思議がわかる本』 三笠書房（1991年）

伊藤隆二・橋口英俊・春日 喬 編

『生涯発達と臨床心理学』 駿河台出版社（1994年）

機能性食品

荒井 綜一

食品には栄養面での働き(一次機能)と嗜好面での働き(二次機能)の他に病気予防面での働き(三次機能)がある。そして、三次機能が効率よく発現するように設計された新食品を機能性食品(functional food)という。これは「日常の食生活のなかで摂取することによって病気のリスクを軽減させる食品」と定義される。いろいろの病気のリスクを軽減させるさまざまな機能性食品が開発されているが、その中から厚生省が法的に認可したものをとくに特定保健用食品という。血圧の上昇を抑制する食品、コレステロールを低減させる食品、アレルギーを予防する食品などがその例である。

約15年前、日本(文部省研究班)が世界へ発信した三次機能と機能性食品のコンセプトは英国の有名な科学誌「ネイチャー」(1993)に紹介され、各国に強いインパクトを与えた。最近では、従来の食品学や栄養学の枠を超えた新しい科学“functional food science”が国際的に展開されるようになった。学問体系で見ると、従来の科学が糖質、資質、蛋白質、ミネラル、ビタミンといった成分体系であるのに対し、この新科学は予防すべき病気や折止すべき生体異常を対象にしており、例えば癌、老化、感染症、免疫異常(アレルギーなど)、内分泌障害(骨粗鬆症など)、循環器疾患(高血圧症など)、消化器疾患(便秘など)、行動・心理障害(不眠、味覚異常など)を体系の基盤とする食品学なのである。

機能性食品とその科学に関する最新の内外の状況をなるべく具体的に紹介し、正しい食生活設計に少しでも役立てていただきたい。

〔参考文献〕

- 荒井綜一監修「機能性食品の研究」
(文部省重点領域研究成果報告集)、学会出版センター(1995)
荒井綜一ほか「学術の動向」
(日本学術会議編集誌)、32(11)、10-36(1998)

心に反応する身体
— 運動とスポーツが体に与える可能性 —

水村 真由美

私たちの「身体」は、常に、「心」の影響を受けている。例えば、好きな人と初めて二人っきりで話しをする時、心臓がドキドキし、顔が紅潮した経験を持つ人は多いであろう。これは、好きな人を前にした興奮状態によって、交感神経活動が高進し、心拍数の増加や血圧の増加が生じた状態である。また、仕事上のさまざまなストレスによって、胃が痛くなったり、時には胃かいようななどの疾病を生じることも珍しくない。これは、心の状態が悪化した結果、健康を損ねる、いわゆる病気になる状態まで、身体が影響を受けた場合である。一方、心の状態が、身体が行う「行動」に影響を与えることもある。不安定な精神状態が原因で、過食と拒食を繰り返す摂食障害も、その一例である。

では逆に、身体から心への働きかけの可能性は考えられないだろうか?例えば、精神的に落ち込んでいる時、運動やスポーツを行って、気分がすっきりする経験をしたことがある人は少なくないであろう。つまり、運動を行って身体の状態を変えることは、悪化した心の状態を変える可能性をもつのである。運動やスポーツを行うことが、薬以上の効果をもつことは、さまざまな研究報告から実証されている。例えば、更年期障害に伴うさまざまな不定愁訴が、投薬によって全く改善されなかったのに、運動を定期的に行うことで改善されたという報告は数多くみられる。

本講義は、「心」の状態の変化によって「身体」あるいは「行動」がどのような影響を受けるか、また運動やスポーツといった「身体からの働きかけ」によって、心の状態が変化する可能性を中心に概説する。

〔参考文献〕

- 「女性のライフステージからみた身体運動と健康」宮下充正監修、杏林書院
「脳と心を考える」伊藤正男著、紀伊国屋書店
「脳と情動」堀哲朗著、共立出版

不登校を通しての自分さがし

伊藤 美奈子

子どもたちは、心の問題をからだを通して表現する。学校現場で、近年ますます増え続ける不登校。行きたいけど行けない。昼夜逆転し、殻の中に引きこもった状態で苦しい自分さがしの旅を続ける子どもたち。どうしてそんなに学校が怖いのか、学校に行けないのか。不登校の子どもたちの言葉、そして彼らが語る“学校”というイメージには現代社会の問題点が凝集されている。

子どもたちは、自分の気持ちをさまざまな形で表現する。怒りや不満としてぶつける子ども、不安や怖れの感情を前面に出す子ども。言葉でうまく表現できる子どももいれば、甘えや反抗というゆがんだ形で行動化する子どももいる。本講では、そんな子どもたちが自らのおもいを託した詩やことばを通して、現代の学校を持つ意味と、不登校を乗り越えて成長していく子どもたちの力に目を向ける。そして、こういう子どもたちの詩に触れることにより、“不登校”という形で、それまでの自分を壊し新しい自分を作り直すという“死と再生”のテーマに取り組む子どもたちの心の奇跡を述べてみたい。

〔参考文献〕

河合隼雄著 『子どもと学校』 東京：岩波書店(1992年)

伊藤美奈子・本多利子著

『もう一つの学校を求めて(仮題)』京都：カニヤ書店(1999)(近刊)

心と体 ―心身医学的アプローチ―

末松 弘行

心身医学とは心と体の関係を研究して、その結果を多くの病気の診断と治療に活用しようとする学問である。

心身医学が主要な対象とする病態が心身症である。心身症とは、体の病状を訴えているが、それが心の問題のためにおこっていたり、なかなか治りにくくなっているのが心の要因のせいであったりするケースのことをいう。たとえば、職場でのストレスのために胃潰瘍になったり、家庭内の悩みのために、血圧がなかなか落ち着かない人がある。現代のストレスに満ちあふれた生活の中では、心の問題が体の病に影響することが多く、「心身症の時代」といわれている。

そこで、心身症とは何かをくわしく解説し、ことに女性の心身症について、揺りかごから老年期までライフサイクルにそった観点から「女の一生」ということで話す。

そして、このストレス社会を生き抜くための心身医学的な対応法についても触れて、心と体の相関関係について考える。

〔参考文献〕

末松弘行 監修、野村 忍 編『心療内科入門』金子書房(1993年)

末松弘行 他 編『心身医学を学ぶ人のために』医学書院(1996年)

池見西次郎 著『心療内科』中央口論社(1963年)

気温が上がる話

(担当講師) 田宮 兵衛
(所属学科) 文教育学部 人文科学科形象分析学講座
(専攻分野) 気候学

- ① 都市気候 : 都市はその周辺より高温になる。それを、ヒートアイランドという。そのでき方の一つの説明を紹介する。
- ② 成層圏突然昇温 : 50年近く前、北半球の下部成層圏(海拔30kmあたり)で数日の間に気温が数10°上がる現象が発見された。その仕組みを紹介する。
- ③ 地球温暖化 : 温室効果気体濃度の人為的に上昇により、平均地上気温が上昇することになっている。自然科学的な説明はどこまでできているのだろうか。

こういう話への関心の始まりは、人間は微妙な環境の下で生存していることへの関心であると後から理由付けをしている私は、果たして学問について語れるであろうか？

〔参考文献〕

小倉 義光 (1984) : 『一般気象学』 東京大学出版会

テルペノイドの世界に魅せられて

(担当講師) 永野 肇
(所属学科) 理学部 科学科
(専攻分野) 有機化学

テルペノイドとは、

- (1) どのような化合物なのか
- (2) 生体内でどのようにして合成されるのか
- (3) 生体内でどのような役割をになっているのか

細胞膜の分子進化についての我々の研究も含めて、テルペノイドの世界の魅力について話をする。

〔参考文献〕

大石 武 編著「天然物化学」 朝倉書店
J, ウィリアム・ショップ著 阿部 勝巳 訳
「失われた化石記録」 講談社現代新書

「教育学部の東洋史とは何か」と問われて

(担当講師) 窪 添 慶 文
(所属学科) 文教育学部
人文科学科形象分析学講座
(専攻分野) 中国古代史

小・中・高等学校で歴史を学んできた学生の多くは、歴史とは過去の出来事を暗記する科目であると考えているだろう。私の子供たちを見ても、歴史の試験勉強といえば人名・地名・年代・出来事を覚えることにつきている。そして大学に入ったら自分の好きな時代について、より詳細に習うことができると考えている。しかし、大学で学ぶ歴史という学問はそういうものではない。ではそれは何なのか。これについては多くの本が著されていて、そう簡単に答えられるものではないが、ささやかな体験をまじえつつ、その一端を述べてみたい。

〔参考文献〕

E・H・カー著、
清水幾太郎訳『歴史とは何か』 岩波新書 1972

「人間の鏡」としての文化人類学

(担当講師) 波 平 恵美子
(所属学科) 文教育学部 人間社会科学科教育科学講座
(専攻分野) 文化人類学

私達が生きている状況は、日常生活の雑多で多様なできごとにひとつひとつ対応することから成っている。そのできごとを、又対応する自分や周囲の人々の行為をことさら認識したり反省したり、比較検討することはない。しかし、社会に大きな変化が起きた時や自分の人生に重大な、そして解釈困難な問題が生じた時には、従来の認識や行動や価値規準を根底から見直す必要がある。文化人類学は、自分の生きてきた世界とは大きく異なる「異文化」を研究することによって、自分の文化を相対化する手掛かりとなる「鏡」を提供すると共に、新しい人生の有り方をオプションとして見る、探る手掛かりを与える。

〔参考文献〕

クライド・クラックホーン、『文化人類学入門』、現代新書
波平 恵美子『暮らしの中の文化人類学』、ベネッセ

「臨床と研究の間で」

(担当講師) 田代 和美
(所属学科) 人間文化研究科
(専攻分野) 保育臨床学

私は、障害児教育に携わることを目的に大学に入学した。しかし、身体的な理由から現場で仕事をすることが不可能になった。大学・大学院と臨床的な仕事はしてきたが、研究と臨床を別の次元に分けて考えてきた。いわゆる基礎と臨床という考えである。この大学に勤めてから、保育学という学問に出会うことになるのだが、そこでは臨床と研究がまさに一つのまな板にのっっていて、切り離すことが難しい。それまで自分自身の価値を問わないで出来る、客観的な研究をしてきた私にとっては、価値を不問に出来ないこの分野は、研究としてどう位置付くのか、どこまで深められるのか難題はあるが、魅力的である。現場で働きたかった私にとっては、現場の先生方と協同で研究できることもその魅力の一つである。保育を広く促えて、子育ても含めると、私自身今そのまっただ中にあり、子供たちが育っていく上で大切な事は何かを常に念頭に置きながら、臨床的な視点から保育学の学問の世界を紆余曲折しながらうろろしてきた自分の研究の内容について話したい。

〔参考文献〕
保育講座「障害児保育」ミネルヴァ書房
「保育方法の探求」建帛社
「保育心理学Ⅰ」東京書籍

極限環境下の微生物の
適応機構について

(担当講師) 富永 典子
(所属学科) 生活環境研究センター
(専攻分野) 植物生理学

地球上には様々な環境があるが、生物はその環境に巧みに適応して生存、あるいは生長している。我々の生活している環境を普通というならば、それからはずれている条件を極限環境ということが出来る。私はこれまでに以下のことに興味を持ち研究してきた。

- (1) イオウ酸化細菌の細胞膜壁の研究
この細菌は好酸性で、硫酸を生成するので細胞外pHが1以下になるが、細胞内は中性である。
- (2) 南極海の珪藻の好冷性(低温でないと生きられない)の機構
- (3) 耐塩性単細胞緑藻の生理学的研究
飽和温度の塩分下でも増殖できる藻類も細胞内にはNaClは殆ど含まれず、グリセロールを大量に合成、分解して外の浸透圧に対応している。殆どは好中性であるが好酸性の藻類もいるので、(4)好酸性緑藻の生理学的研究も比較のため行ってきた。

これらの研究によって、生物の適応機構を明らかにしたいと考えている。

〔参考文献〕
「特殊環境に生きる細菌の巧みなライフスタイル」 畝本力著 共立出版
「植物の生き残り作戦」 井上 健著 平凡社 自然叢書

質問用紙 (各講師あての質問)

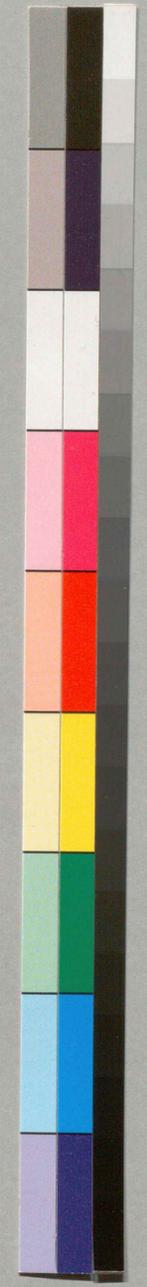
提出期限：7月9日(金)まで

提出先：学務課教務係

「				」 (テーマ名) 講師名			
学部		学科		講座・専攻		年 氏名	
質問事項	(A) テーマを通しての課題						

「				」 (テーマ名) 講師名			
学部		学科		講座・専攻		年 氏名	
質問事項	(B) 個別課題 解答						

「				」 (テーマ名) 講師名			
学部		学科		講座・専攻		年 氏名	
質問事項							



総合コース小論文

氏名	学部	学科	講座・専攻	学年	月	日	氏名

総合コース小論文

氏名	学部	学科	講座・専攻	学年	月	日	氏名

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	



文館コース総合

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題	担当講師名	

文館コース総合

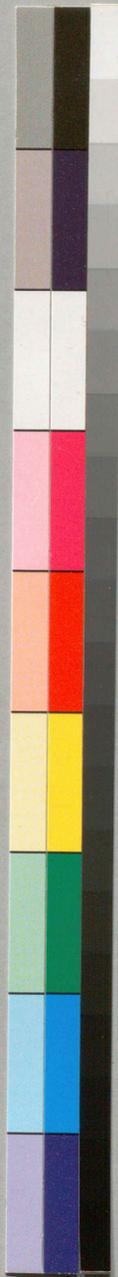
学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題	担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題	担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題	担当講師名	



総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	



学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題		担当講師名

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題		担当講師名

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題		担当講師名

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名
月	日	課題		担当講師名

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	



総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題		担当講師名	



総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題	担当講師名		

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題	担当講師名		

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題	担当講師名		

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題	担当講師名		



文部省総合

	学号	氏名	性別	学年	専攻	講義
	月	日	日			

文部省総合

	学号	氏名	性別	学年	専攻	講義
	月	日	日			

総合コース小論文

	学号	氏名	性別	学年	専攻	講義
	月	日	日			

総合コース小論文

	学号	氏名	性別	学年	専攻	講義
	月	日	日			



総合コース小論文

氏名	姓	名	学籍番号	月	日	年
月	日	課題	担当講師名			

総合コース小論文

氏名	姓	名	学籍番号	月	日	年
月	日	課題	担当講師名			

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題	担当講師名		

総合コース小論文

学部	学科	講座・専攻	学年	氏名	
月	日	課題	担当講師名		



